リリカルなのはStrikerS～オタク転生者の生涯～

九十九 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～オタク転生者の生涯～

【Ｎコード】
Ｎ９７９０Ｘ

【作者名】
九十九　流

【あらすじ】
少女を助けるために
トラックに轢かれて
死んでしまった
オタク学生のリリなのでの
奮闘記です。
なお、こちらはオリ主最強、チートものです。

一話　俺が死んだ日（前書き）

どうも。九十九　流です。
初小説、初投稿なので
温かい目で見てください。

一話　俺が死んだ日

今日、俺は死んだ
理由は今から説明しよう
それは学校帰りに起こった

ここは日本のある
ところにいるごく普通の
専門学生の物語である

『な～んてな、自分で考えてて痛くなってきたわｗｗｗ』

俺は神代達也アニメやゲームが好きな専門学生だ

今何をしているかと言うと家に帰っている途中である

『はぁ～今日も、何もない平和な一日だったな～』

そんなことを言いながら、俺が家に向かって歩いていると
『あの子、ヤバいぞ』

そんな声が周りから
聞こえ始めた周りを見回してみると・・・
１０歳位の女の子が
車道の真ん中でうずくまっていた。よく見れば、子猫を抱えている
じゃないか。

そして、それを見た瞬間
俺の体は走り出していた。
理由は一つその子に向かって
トラックが走ってきていたからだ。
『『ウォォオ！！！』』

『『えっ？』』

もう片方の声は何だ？
反対側からも人が来てたのか
ってそんなこと
考えてる時じゃない

『おい、そこのお前、その子は任せたぞ』

『何を言ってr『うるせー！！さっさと行けっ！！』』

『ドンッ！』
俺がそいつの体を押すのと
俺がトラックに轢かれる
コンマ何秒の差だった

『ドゴンッ！』

俺の体が轢かれて地面につく
までの時間はとても長く感じた
（あぁ、俺は死ぬんだなぁ。まぁ、こっから落ちたら即死だもんなぁ）
そんなことを考えながら俺は落ちていく。
だが、なぜか心は冷静だった

何故だろうか・・・
もう地面が目前だ。そうして

『グシャッ』

今日、俺は死んだのであった。

一話　俺が死んだ日（後書き）

どうでしたでしょうか？
本編には2～3話ぐらいに
入ると思います。

二話　女神様との出会いとチート化していく自分（前書き）

連続投稿です
変な所があったら
感想にお願いします

二話　女神様との出会いとチート化していく自分

前回のあらすじ

少女を助けるためにトラックに轢かれて死にましたｗｗｗ

『いやいやｗｗｗじゃねーだろ』

オ～ウ何という一人ツッコミ

『で、ここ何処だ？知らないベッドだ。まぁ、それはともかく何故俺は手足、固定されてん』

そう、今俺は手足を固定され拘束状態なのである。

なんでだよ

『それは、貴方を逃がさないためです』

『・・・ッ、誰だ！』

『私は貴方に解りやすく話しますと女神ですね』

『女神だと！ということは、俺は死んだのか』

『はい貴方は少女と青年を助けて、替わりにトラックに轢かれて、死んでしまいました。

』

『では、なぜに俺はここに居る女神直々にお迎えとは、なんかあるんだろう』

『・・っ、貴方なぜそれを』

『俺のオタク脳を舐めてもらっちゃ困るね～まあ、差し詰め何かの理由で転生ってとこかい』

『凄いですね。正直、舐めてましたよ。まあそれで、貴方を転生させるんですが理由を教えておきます。貴方は生きていた頃に良いことをとてもしてきましたね』

『いや、俺に聞かれても身に覚えが無いんですけど。あと、何時になったら、自由になれるんですかね？』

『あっ・・・すいません。今外しますね』

スッ・・・

『お～、取れた取れた。いやこれで楽だぜ。で、転生がどうしたって？』

『あっ・・・はい、で生きていた頃に良い行いをしたので貴方に転生の許可が出たんです。』

『ふ～ん、で転生先はどこなわけ？』

『えっと、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳの世界ですね』

『えっ・・・まじで！』

『はい。勿論能力付与もしますので、原作ブレイクしても良いですよ。』

『能力だと・・・女神よ、自分で言うのも何だが、良いのかしけると、チートキャラが出来ちゃうぜ？』

『それは大丈夫です。そのような、平行世界が出来るだけですから』

『ふ～ん、じゃあ遠慮無く、能力付与させて貰うよ』

『はい、ではどうぞ』
まずはどうしようか取り合えず身体強化でもしとくか

『まず、初期魔力値ＡＡＡで使えば上がる能力と、運動神経と身体能力を技術を遠野志貴と両儀式の力で』

『あら、てっきり私は吸血鬼の真祖とかにしてください。とか言われる物だと』

『いやいや、吸血鬼の体だと流石に何でも出来ちゃうからね』
『そうですか、他には？』

『ネギまの闇の魔法を使えるように、とアーティファクトを二枚欲しいかな』

『アーティファクトはどんな能力を？』

『一つは、俺の記憶や見た武器やアイテムを魔力で作りそのままの能力で使うもの、二つ目は闇の魔法で一度吸収したものを保存して使うもの』

『うん、良い感じに、チートだね、まだまだ行けるよ、どんとこい！』

『おっおぅ・・・（なんか女神本性出し始めたな、楽しくなって来たのかな？）で、あとはテバイスだな』

『そうですね、やっぱり欲しいよね。デバイス』

『そうだな、一つ目は待機状態が時計型で、アーティファクトで出した武器やネギまの魔法を非殺傷にする能力で見た目は篭手かな、二つ目は待機状態が指輪で、基本形がナイフ、そのほかに、何種類か変化できる。感じかな』

『他の種類？』

『それは、・・・って感じで』

『良いねそれ面白いよ！』

『こんなとこかな、じゃあ後は宜しく。』

『ほいほ～い。分かったよじゃあ、世界に送るからね』

『わかった』

『じゃあ最後に楽しい人生を』

スゥン

地面に穴が開いた
これはまさか
『ふざけんなって。あ～落ちる～～るぅ～』
こうして俺のリリカルなのはでの物語が始まるのであった

二話　女神様との出会いとチート化していく自分（後書き）

次回から
なのはの世界に入ります
頑張りますので
どうぞ宜しくお願いします

≪キャラ設定≫（前書き）

キャラ設定つくってみました。
また
話の間に
新しく創るかも知れません

≪キャラ設定≫

名前：神代　達也

歳：１９

好きなもの：アニメ、ゲーム、楽しい空間

嫌いなもの：大切な人を傷付ける人、戦い（人を守るためなら戦う）

アーティファクトの説明

《全てを創る者》

形・・・本型

能力・・・自分のこれまで記憶してきた武器や、アイテム等を登録し、自分の魔力で創り、
創った物をそのままの能力で
使える能力
（創った武器を仲間に渡したり使うことも出来る）

制約

1．自分の見た事のある物のみ（記憶していれば、アニメ、ゲームの物でも出来る）

2．能力が強いほど消費魔力が多くなる

3．武器の扱いは、使う人の
技術による

≪無限の力を使う者≫
形・・・篭手
能力・・・自分の見た（記憶した）技、能力をコピーしたものを、保存し自分の魔力で、詠唱を飛ばして発動できる
制約
1．一度吸収していること
2．記憶の場合、精確な詳細が必要
≪デバイス≫
デバイス名：メディア
愛称：メディ
待機中：腕時計
戦闘中：手袋型
能力：殺傷設定の物を非殺傷設定にする
制約：その武器の強さによって常に魔力を消費する
デバイス名：エヴァンジェリン
愛称：エヴァ
待機中：勾玉の形のペンダント
戦闘中：１ｓｔ　ナイフ型

２ｎｄ　砲撃型
３ｒｄ　ナックル型
Ｆｉｎａｌ　魔槍※
※イメージはネギまの影槍術
　みたいなもの
制約：魔槍の量は魔力の量による

≪キャラ設定≫（後書き）

キャラ設定はどうでしたか？

説明が下手なので
これで分かってくれると
嬉しいです

次からは本当に本編に
入ります。
こうごきたい

三話　突然なる登場（前書き）

スイマセン
一ヶ月以上開いてしまって
理由は後書きの方に書きます

三話　突然なる登場

前回のあらすじ
女神と共にチート開発をし
突然穴に落とされる

『うわぁぁぁ』
現在、空から降下中なうｗｗｗ
『笑える状況じゃないなどうすっかな～』
『いや、魔法でも使えば良いじゃないか』
『そっかぁ、その手があったか！！』
ちなみに今しゃべったのは
俺のデバイスのエヴァである
『いや、今まで気づかなかったの？』
『気づいてたけどさ、突っ込みを期待してたｗｗｗｗ』
で、今のはもう片方のデバイスのメディである
『では、行きますか。【風よ】』
ブワッ　スッ

『着地成功かなっ』

『何が『かなっ』だよ気持ち悪いな』

『ちょっとそれは言わない約束だろ』

『そうですよ、いくら本当の事でも言って良いことと悪いことがありますよ』

『ちょメディまで・・・（泣）
で、ここどこなん？』

『今検索中です、少し待ってください』

『いや、メディその時間はなさそうだぜ』

『そうみたいだな。９時の方向から生体反応。数は４つ。』

『検索完了。ここは、ミッドチルダ機動六課の訓練施設のど真ん中です。』

『えっ・・・まじで！ってことは近づいて来るのって・・・』

『ザッ、そこの貴方、武器を放棄して、何処の誰かを答えなさい（みんな一様戦闘準備しておいて）』

『『『（了解）』』』

『取り合えず、聞きたい事があるんだが、じゃあそこの髪がオレンジの君、君がリーダーっぽいから、君に聞くけど、君達は俺の敵な

のかなっ？』

『それは、貴方が決めることです。で、武器を捨てて投降するんですか？』

『じゃあ、戦闘準備してる時点で、敵と認識される覚悟はしてたみたいだから、敵として認識するからね。じゃあ、エヴァ、モード１ｓｔでＳｅｔｕｐ』

『しかたないな、Ｓｅｔｕｐ』

『みんな来るよ戦闘体制で訓練道理に』

『『『了解』』』

『さってと、君達の実力見せて貰いましょうか。まずは補助を潰すかな、行くぜ！』

ヒュン

『えっ、キャァ！』

バタッ

『大丈夫だ非殺傷だからな』

俺は初撃油断したところに

一閃を与え一人撃破

『次、モード３ｒｄ。そんでもって、マギアエレベア発動』

ドゥン

『えっ、何なのあいつあの魔力量異常だわ』

『そして、アデアット【無限の力を使う者】で、詠唱省略【千の雷】コンプレクシオー【雷天大壮】』

『えっ、あの人僕と同じ魔力変換資質持ち！』

『ふぃ～準備完了っと、これ使うとデバイスが空気になるんだよな・・・まあしゃーないよな次は、あの槍持ったちびっ子だな』

そう呟いた瞬間には
槍の少年の前に行き撃墜を
完了していたのであった

『グフッ！』

そんなナレーションを入れている間にも今度は短髪少女を
一撃で気絶させていた

『ハァ・・・手応えねぇな』

『いや、普通あの速度は付いて来れないから！どこぞのバグキャラとか、コーヒー党代表じゃ無いんだから』

『（何なのあいつ知らない技とか、フォワード陣がほぼ一瞬でやられるなんて・・・）』

『さ～て残りはオレンジだけだな一発やｒ『ちょっと待ったー！！』

『

『あんた誰だ？新手の敵かい？それとも話し相手？』

『うちらは話し合いがしたいんやけど話し合いで解決せーへんか？』

『（って言ってますけどどうしますマスター？）』

『（う～んいいんじゃね？エヴァはどう思う）』

『（お前の好きにしろ、私はめんどくさい）』

『（じゃあ話し合いで決定）いいぜ話し合うか』

『ほんまかいな！！じゃあ、フェイトちゃん、なのはちゃん、フォワード陣を医務室へ』

『で、場所はここで行くのかい？』

『立ち話もなんやし、ティアナ部隊長室に連れてきてくれへんか？』

『あっ、はい分かりました。今行きます。ではついて来てください』

『はいよ～、っとその前に、マギアエレベア解除、それとアベアット、エヴァ、メディ戻っていいよ』

『それじゃあ、こちらです』

ツカツカツカ

ツカツカツカ

『（きっ、気まずいな）』

『（我慢しなさいあとちょっとでしょ！）』

『着きました。こちらが部隊長室です。』

ウィーン

そんな音が似合いそうな

感じで扉が開いたその先には

『いらっしゃいです～』

なんか小さな妖精みたいなのが出迎えてくれた。

正直小さくて

かわいかったりする

『いや～ホントに話し合いになるとは思わんかったわ』

『で、行きなりだが聞きたいことを手短にそして端的に、３０文字以内で、あとそこにいるピンクのポニテの人と、赤いチビスケの説明を希望します。』

『誰がチビスケだよ、あぁん喧嘩売ってんのか？』

『（なあ、何か悪い事言ったか俺？）』

『『（確実にチビスケだな（でしょ））』』

『（そっか）すまんすまん俺名前を知らないと、外見で名前を勝手に付ける癖があるのさ、だから許してくれないかい？』

『ふん』

『あ～あ怒らせてしもて、あの娘はヴィータ、そしてその隣の人が』

『シグナムだ』

『で、神代君を連れてきてくれたのが、ティアナ、そして妖精みたいなのが、リィンや』

『へ～』

『で、本題や何で神代君はあそこにいたのか、何故フォワードと戦ったのか？あの、能力や技について教えてくれへんかな』

『ああ、あそこにいた理由は、分からん気がついたら、空から急降下してた、能力については、ノーコメント俺がこの部隊？に協力したら教えるわ、でフォワードと戦った理由は・・・』

『理由は・・・？』

ゴクッ

『その方が楽しいからだぜ！』

ズゴッ

『何やその理由マジでいってんのか？』

『ああ、力を計る意味もこめてな』

『まあええわ、この事はあとあと、でいきなり急降下ってことは、次元漂流者かいな』

『まあ、そうなるかな。俺としては、行く当ても無いしこの部隊で保護してくれると嬉しいんだがな。勿論保護してくれたらあんた達を手伝わせて頂くぜ』

『ほんまか！じゃあ、それでええか？ええなら屈託魔導使の試験を受けてもろうて、受かったらＯＫや、どうする』

『ああ、それでいい。で試験内容は？』

『筆記と実技、そしてレアスキル持ちだけやけどその試験、この３つや』

『早い方がいいから３日後とかに出来ないか？』

『連絡してみないとわからんがもしそうなったときは、筆記とかどうするん？』

『まあ、大丈夫だろ、なあ』

『まあ、大丈夫じゃないのか？お前頭いいだろ』

『マスターの頭脳なら問題無いかと』

『すごい自信やなまあ、掛け合ってみるわ』

こうして、機動六課入りを

果たす権利を得た、達也であったはてさてどうなることやら

次回へつづく・・・・

三話　突然なる登場（後書き）

《今回のあとがき》

達也『や～、今回から始まりました。このコーナー』

エヴァ（これから『エ』）
『何が始まりましただ一ヶ月以上も行方くらましおって、どこ行ってたんだ！あの作者は』

メディ（これから『メ』）
『まあまあ、エヴァあまり怒らないであげて。』

エ『なんでだよちゃんとした理由があんのか』

作者『実は、今ちまたで噂のマイコプラズマ肺炎にかかりまして』

メ『しかも、修学旅行明けでさあ書くぞって意気込んでた時らしいの』

エ『マイコプラズマっていうとあの天皇陛下がかかってたやつか』

達也『あれは、咳もずっと続いて、熱出るらしいしな、そりゃつらいわ』

作者『学校からも出席停止喰らって家で寝込んでたんです』

エ『あ～すまん私が悪かった』

作者『これからは、最低でも一週間に一回は更新しますので』

達也『こんな作者ですがこれからも見てやってください』

四話　能力説明とみんなの紹介（前書き）

ちょっとキャラの口調が
変もしれませんが
ご了承ください

四話　能力説明とみんなの紹介

前回のあらすじ

フォワードと戦った後、はやてがきて話し合いをして、機動六課に保護されました

『ほな、フォワードが起きたら紹介しよか』

『俺はいつでもいいぜ。でよ部隊長さんよ、俺はそれまでどこにいればいいわけ？』

『う～ん、ほな私に先に能力について教えてくれへんか？』

『ああ、いいぜ』

『ほな決まりやな。シグナム達も、もう戻ってええで』

『分かりました。主はやて』

ウィ～ン

そんな音をＢＧＭに

シグナム達は仕事に

戻って行った

『ほな、早速やけど話してもらおか』

『うむ。まずデバイスについてだな。このペンダントの方はエヴァこいつは武器の方でな、モードが変わるんだ』

『変形型のデバイスか～』

『そそ、１ｓｔがナイフ、２ｎｄが拳銃、砲撃型、３ｒｄがナックル、でＦｉｎａｌが魔槍だな』

『魔槍？魔槍ってなんや？』

『魔槍っていうのはな、文字通り魔力でできた槍のような物だよくあるだろ、魔力刃とかそれの応用だな。』

『じゃあ槍型なんかいな』

『そうゆう訳じゃない。魔力というのは、基本的に形は自由だろだから、それを利用して、鞭の様に使ったり、まとめて槍にしたり、魔力刃にしたり、色々と出来る訳なんだよね。』

『ほ～形が自由やから応用が利くと』

『そうゆうことだな。まあ、これは実際に見た方が解るから。まあそのうち見る機会もあるだろうよ』

『それもそやね』

『ほれ、エヴァあいさつすれ』

『あぁ、私がエヴァだ。この愚鈍で最低な、糞マスターのデバイスを仕方なくやっているものだ。こんなマスターだが仲良くしてやってくれ。』

『おいエヴァ、それは酷くないか！それはストレート過ぎるぜいくら慣れているといっても、それは心に響くぜ。・・・くそっ、ツンデレのくせに（ボソッ』

『おい聞こえてるぞ、誰がツンデレだアァン、今どこでデレたんだ？』

『まあまあ、喧嘩しーなにしてもやけに、感情のはっきりしてるデバイスやね』

『まあな、で腕時計の方がメディア、これは特殊なデバイスでな。能力が殺傷武器を非殺傷にするデバイスなんだ。』

『うん？それに何の意味があるねん。もともと非殺傷やんけ』

『そりゃそうなんだがな。まあ違う能力にも関わってくるから頭に入れといてね。じゃあ挨拶よろしく～』

『こんにちわ。私はメディアといいます。これからよろしくお願いしますね。はやてさん。私の事は、メディと呼んでください。』

『あっはい御丁寧にどうも。でその、ほかの能力とは？』

『この、二枚のカードです。一枚目は【全てを創るもの】といって、俺の記憶してきた武器やアイテムを登録して、それを自分の魔力で創って、そのままの能力で使えるんです。』

『ハァ！？なんやそれえらいチートやん』

『そうでも無いですよ。制約もけっこうありますし。』

『つまりあれやろ、ゲームとかの回復アイテムとかを創って使うこともできんのやろ。武器とか』

『そうです問題はその武器なんですよ。質量兵器の所有は犯罪ですし、これで創った武器は、殺傷設定なんですよ』

『そ～なんか。とゆうか、殺傷設定じゃだめやんけ！』

『そのための、メディなんですよ。覚えてますか能力』

『もちろん、確か・・・武器を非殺傷に・・・もしかして！』

『そうです。この能力で創った武器を非殺傷にするんです。』

『ほ～。そのための、メディさんか～』

『そうゆうことなんです。』

『じゃあ、最後の質問や。あのいきなり見えなくなった技はなんなん？』

『あ～あれですか。禁則事項です。』

『いやいや、いまさっき話すゆうたやんけ』

『いや、話してもいいんですけど、理解できるかどうか・・・なぁ』

『？どうゆうことや？』

『簡単に説明しますと、部隊長は、精霊の存在は分かりますか？俺が使っている魔法は精霊の力を借りて、その力を利用させてもらってるんです。』

『すまん、全く意味がわからへんのやけど・・・』

『まあわかんなくてもしょうがないですね。部隊長達の使ってる魔法とは、根本から違いますから・・・。そうですね、説明するとなると、魔力変換ありますよね？』

『あるな～、電気やら炎やら』

『そうです。それの強化版を、色々な能力付きで使える感じですかね。例えばさっきなら、雷を纏って雷と同じ速さで動けて、当たった相手に電気ショックを与える感じですかね。』

『ハァ？雷の速さってどれくらいや』

『確か・・・なんぼだっけ？エヴァ』

『たしか、秒速１５０Ｋｍとかだったはずだぞ』

『ハィ？１５０！早すぎや対応できる人いるんかいな！？』

『いますよ。弱点とかありますし。』

『弱点？』

『例えば、本物と同じ様に、先行電流、ストリーマーともいいますが、それが出るので、カウンターの餌食なんですよ。』

『は～デメリットもあるんやねちゃんと』

『まあ、世の中そんなに上手くないって事ですね。』

『そうやな～。これであらかた質問も終りや、みんなが起きるまで『はやてちゃん、フォワード陣が目を覚ましましたよ』ナイスタイミングやな。で怪我はないんか？』

『はい。不思議なことに外傷一つありませんでしたよ。』

『そーなんか、じゃあ部隊長室に来てほしいって伝えてくれるか？あとシャマルも一緒にきてな。』

『分かりました。』

プツン

ピンポンパンポ～ン♪

『え～前線メンバーは部隊長室に今すぐきてーな。急いでな～。』

ピンポンパンポ～ン♪

『音軽いな～』

『もう少し待っててないまくると思うから。』

『『『『失礼します。』』』』』

『来た見たいやね。まだ全員揃ってへんから楽にしててな。』

『『『『失礼します。』』』』』

『来た来た。これで全員やな。じゃあ、みんなに集まってもらったのは他でも無い。この人のことについてや。』

『え～神代達也と言います。まず、フォワードの皆さん、いきなり戦闘吹っ掛けてスイマセンでした！！！』

『『『『へっ？』』』』』

達也は、すごい速度でいわゆるジャンピング土下座をしたのであった。

『いやいや、いきなりそれはないやろ。ほれ、ちゃんと自己紹介しーな』

『そうですよ。いきなり土下座されても、こっちも困りますから。』

『そうか？じゃあ、改めて・・・ここで魔導使（仮）として保護されました。神代達也です。これからヨロシク。』

『『『『『えーーー！！』』』』』

『耳痛て～』

『どうゆうこと？はやて？』

『じつはな、かくかくしかじか』

閑話休題

『と、いう訳らしいんや。で協力してもらう事にしたんや。』

『そうゆうことですか・・・』

『そや。じゃあこっち側も自己紹介といこうやないか。』

『じゃあ、まずは私からね。私はスターズの隊長の高町なのはっていいます。教導官をやってます。なのはって呼んでね。』

『ああヨロシク。』

『次は私で。こんにちは、私はライトニングの隊長のフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。フェイトって呼んでね』

『おうヨロシクな』

『私の事は知ってるなヴィータだスターズの副隊長をやってるヨロシクな』

『私の事も知っているな。シグナムだライトニングの副隊長をやっている。ヨロシクな。あと今度、模擬戦でもしないか？』

『ああいいぜ。ヨロシクな』

『私は、ザフィーラと言う。男同士よろしく頼む。』

『うぉー犬が喋った！』

『私は狼だ・・・』

『次に、私はシャマルよ。医師をやってるわ。ヨロシクね。』

『ああ、ヨロシク』

『じゃあ次はフォワード陣いこか。』

『はい、スターズ３のスバル・ナカジマです。よろしくお願いします！』

『同じく、スターズ４の、ティアナ・ランスターよ。よろしく』

『お～元気だな。いい声だな。これからヨロシク』

『ライトニング３のエリオ・モンディアルです。これからよろしくお願いします。』

『ライトニング４のキャロ・ル・ルシエです。よろしくお願いします。』

『へ～小さいのに頑張るんだな～礼儀正しいし。よろしくな。』

『これで、全員か？ほなこれで解散にしよか。』

『いや、待ってくれ・・・大事なことを聞いてないぞ。』

『なんや？いきなり真剣な声して。』

『それは・・・俺の部屋はどこになるんだ結局』

『それなら、空き部屋があるからそれつかいなや。』

『誰が案内してくれないか？』

『私が行こう』

と、言ったのは

珍しくシグナムだった

『シグナムええんか？』

『はい。主はやて書類もあらかた、終りましたので』

『じゃあ頼むわ。』

『はい。では行こうか』

『はいよ。ヨロシク』

『じゃあ、今度こそ解散！』

『で、なんでまたシグナムさんが？』

『なんだ、不満なのか？』

『いや、余り社交的に見えなかったというか苦手そうだったからさ』

『何と言うか、興味が湧いてな。というか、私の事はシグナムでいいぞ。』

『ふ～ん、わかったじゃあそう呼ぶからな。』

『ああ。お前からは何か意志を感じるからな。』

『意志ね～。』

そんなことを話している間に、宿舎に着いて、ただいま部屋の前なう

『そら、着いたぞ。家具とかは着いて居るから、足りなかったら、買いに行け。』

そうゆうと、シグナムは歩きだしてしまった。

『シグナム～ありがとな～！』

『ああ！』

というと、本当に行ってしまった。

『さて、中入るか。』

ウィーン

『おお～結構広いな～。さて疲れたし寝るかな～』

『明日は早く起きて、自主練でもするかな。エヴァ、メディ、明日は5時に起こしてくれないかい？』

『仕方ないやつだな。』

『分かりました。ではその時間までお休みなさい。』

『ああ、お休み』

こうして、波乱で怒涛な一日が終わった。

四話　能力説明とみんなの紹介（後書き）

《第二回あとがきのコーナー》

達也『いや～やってまいりました。このコーナー。今回で二回目ですよ』

エ『おい、糞作者』

作者『はいなんでしょうか？』

エ『私達の出番少な過ぎないか？私は5回くらいで、メディに関して言えば2回だぞ（怒）』

作者『すいませんしたー！！』

メ『理由はあるんでしょうね～（ゴゴゴゴ』

作者『勿論ありますよ。その理由はあそこで絡ませると、長くなりすぎになるような感じがしたので止めました。』

達也『なんだ理由あるんじゃん、てっきり絡ましかたが思い付かないとばかり・・・』

作者『違いますよ！酷いですよ！泣きますよ！』

エ『まあ、これからもちゃんと頑張って、定期更新していけよ。飽きやすいんだから。』

作者『分かってますよ。エヴァさん』

メディ『皆さんからの感想、指摘など、受け付けております。どし

どし、お願いしますね。』
達也『それではさようなら』

五話　魔導使試験について・・・の説明（前書き）

また、
更新が遅れてしまいました。
スイマセン
最近、忙しくて更新速度が
落ちるかもしれませんが
お願いします。

五話　魔導使試験について・・・の説明

前回のあらすじ
機動六課に入るために
魔導使試験を受けることに
なりました。

『マスター、時間です。起きてください。』

『おい、起きろといっているだろうが。』

『うん？ふぁ～良く寝た。』

『良く寝たじゃない！！何時まで寝ているんだ！！』

『そうですよ。マスター、朝練するんでしょう？』

『ああ。する。支度して来る』
タッタッタ
バシャバシャ

身支度している間に少し
説明をしよう。
この寮は、基本的には女子しか居ないらしく、男は俺とエリオしか
居ないそうだ。
正直、気まずかったりする。

『いや～、さっぱりした。じゃあ行くか。』

外に移動中・・・

『やはり、海はいいな！早速走るか！メディはペースの上下を記録しといてくれるか？』

『はい。いつもどうりに』

『エヴァは５０周するから、数えてくれるか？』

『仕方ないな、それぐらいなら良いだろう。やってやる。』

『じゃあスタート！！』

タッタッタッ・・・

こうして、始まった朝練
とりあえず、訓練場の近くを
走って、ウォーミングアップ。そのあとは、武器事の練習をするのが、俺の練習だ。

『あと、一周だ。最後は全力疾走だぞ！！』

『おう！！』

その一言で全力ダッシュを
しておわりである。

『終わった～！いやいや、疲れた疲れた。』

『マスター、お疲れ様です。ペースは少しばらつきがありましたが、許容範囲でしょう。』

『そっか、じゃあまずはナイフだな。エヴァ、１ｓｔモードセットアップ』

『うむ、わかった』

エヴァはナイフの型に変形し
俺は俺が知りうる中で、一番
強いナイフ使いを仮定し、
そいつと戦うイメージで
ナイフを振っていく。

『フッ！ハッ！ウリャ！』

シュッ　ヒュッ　ザッ　ガッ

『うわっ！ふう、負けだな。やっぱり、強いわあいつは。』

『そうなのか？私達には見えないからわからないが、かなり押されていたな』

『ああ、あいつは強い半端じゃなくな』

『さて次は『達也くん、今すぐ部隊長室まで、来てや～』なんだよ、タイミングのわるい』

『マスター、とにかく行ってみましょう。』

『わかったよ。戻っていいぞ。朝練の続きはあとでだな。ハァかったるい。』

『そんなことといわずに行きますよ！！』

メディが怒りそうなので、おとなしく向かうことにする。

移動中・・・

ウィーン

『来たぞ。はやてさんよ。』

『よう来たな。うん？なんか汗かいとるけど、どうしたんや？なんかあったんか？』

『あぁ、朝練やってる途中に、呼び出されたからさ。すまんな汗臭くて。』

そういって、すぐに頭を下げる達也であった。

『いやいや、気にせんでええよ。で、呼んだ理由なんやけど試験の内容を伝ええとらんかったからな、それと実施日が決まったで！その報告や。』

『ああ、そのことですか。でその試験の内容とは？』

『筆記と、実技やで』

『えっ・・・筆記あるんですか・・・』

いきなり、達也の顔が青くなっていく、あからさまにやばそうな顔をしてフラフラして、
なにかブツブツ言っている

『筆・・るなん・・聞・・よ。世界・・強・でき・・うわーん（泣）』

そうしていきなり
泣き出したのであった。

『えっ、いきなりどうしたんや泣き出したりして！どうゆうことや？メディ？』

『それがですね、マスターは世界中で一番嫌いなのが勉強なんです。それでいて、やればちゃんと１００点取れるような、頭脳なんですけどね。』

『簡単に言うと、勉強が嫌いなのに、筆記があって絶望して、泣いていると』

『そうゆうことだな。こいつはやらないせいで、異常に点低いからな。』

ここでエヴァが追い打ちをかけるように、さらに言葉をかける

『だいたい、出来ればやるのにやらないから、ツケが回って来るんだよ』

『スイマセンでしたね。どうせ勉強だけはできませんよ～だ』

『マスター、今回ぐらいはちゃんと勉強しましょうよ。小学生じゃないんですから。ハァ・・・。』

『簡単に言うと、頭は良いのに勉強が大嫌で、なのに筆記があって絶望して泣いている。ということやね。』

『筆記は絶対なんだろ。じゃあやらんきゃいけんだろ!!いいよ、やってやるぜ!筆記なんて糞くらえだぜ!なめんなよ!』

『おっ、やる気出たみたいやな。じゃあ、フェイトちゃんに模擬問題やら、過去問やら、わたしてあるから。がんばりーや。』

『おう!任せとけ!で、ハラオウンさんは何処に?』

『今は、なのはちゃんとフォアードの訓練しとると思うで。』

『了解。話しは通してあるんだろうな?』

『もちろんや。ぬかりないで!』

『そかそか、じゃあ行ってくるから。伝説を作ってやるぜ!』

『がんばりーや。ほな解散やね』

こうして、フェイトと勉強することになった、達也だった。外を移動中・・・

『お～、やってるな。フォアード陣すげーなおい。』

『あっ、達也くん。どうしたの一緒に訓練しにきたの？』

そんな恐怖の言葉を囁いた
管理局の白い悪魔、
あらため、魔王こと、
高町なのは教導官の言葉を
『魔王じゃないもん』
こっちにつっこむなよな、

ともかく、訓練施設に着いたのであった

『高町教導官どうも。ハラオウン執務官はいらっしゃいます？』

『フェイトちゃんなら、いまエリオとキャロのところにいると思うよ。あど私の事はなのはでいいよ。敬語も無しでね。』

『わかった。ありがとう。行ってみるわ』

『うん。でもフェイトちゃんに用事なの？』

『ああ、なんだか魔導使試験の筆記の問題を持ってるらしく、もらいに来たんだよ』

『あっそうなんだ。頑張ってね魔導使試験。実技の訓練なら、喜んで手伝うからね！』

『おう。そんときは、よろしくな。じゃあ行くわ。』

ひとしきり、話したところで

ちょうどエリオ達の訓練が、
一段落したらしく、フェイトが戻ってきた・・・

『達也君、おはよう。もう、こんにちわかな?』

『こんにちわ、ハラオウン執務官。筆記の問題を受け取りに来ました。』

『うん。わかった。あと、私の事はフェイトでいいよ。できれば敬語も止めてほしいな・・・。』

『じゃあ。そうするわ。フェイトさん。で、とりあえずどうします?』

『昼だし、とりあえずこれから一緒にご飯でもどうかな?』

『いいね。俺もお腹すいたし。』

『じゃあ、行こうか。』

というわけで、
美人なフェイトと
ご飯を食べるという素敵イベントを発生させて、表情には出さないが浮かれている達也。
これから地獄が始まるとも
知らずに・・・

続く・・・

五話　魔導使試験について・・・の説明（後書き）

≪第三回あとがきのコーナー≫

作『どうも～最近足を怪我して全治三週間な、作者です』

メ『はぁ、被害者とはいえもっと注意してください。』

エ『お前は、もともと注意力が散漫なんだからな。』

作『はい・・・。』

エ『で、今回はなにをするんだ？』

作『今回はちょっとした、アンケートをしようかと。』

エ『なにをアンケートするんだ？まさか、もうはや、ネタ尽きました。（笑）みたいなことじゃなかろうな？』

作『違いますよ！僕をもう少し信じてくださいよ！』

エ『じゃあ、日頃の行いを改めろ！』

メ『まあまあ、二人とも話しが脱線していますよ。』

作『そうだった。アンケートの内容というと』

？セリフの横にあとがきの様にキャラの名前を入れて、わかりやす

くしろよ！！

？もっと、描写を増やして対応しなさい！馬鹿者！！

？このままでいいよ

作『この三択です。気軽に答えてください。なお、アンケートは感想かレビューに投票お願いします。』

エ『感想に意見をしてくれると、改善点や悪いところが解るからうれしいな。』

作『これからも、この小説をよろしくお願いします。』

メ『また、次の話しまで、さようなら。』

六話　勉強という地獄　1日目（前書き）

遅くなってスイマセン
今回は短いです
本当にスイマセン
ではどうぞ！

六話　勉強という地獄　1日目

前回のあらすじ
魔導使試験に向けて、
勉強するためにフェイトに
過去問を貰いに来た

ただいま、にフェイトさんと昼ご飯を食べるために食堂に来ています。

『さて、なにを食べるかな～・・・って、やけに地球の食べ物が多くないか？』

『うん。今ミッドチルダでは地球の食べ物が流行ってて、管理局も取り入れてるみたいだよ。』

『へ～そうなんだ。まあ、地球の食べ物美味しいしね！じゃあ俺は・・・カツカレーと、醤油ラーメンと、たらこスパゲティーお願いします。』

『えっ！・・・達也君そんなに食べるの！！』

『えっ、あっ、ああ、こんな体でも結構食べるんですよね～』

『へ～、ビックリだよ。そんなに食べるのエリオとか、スバルぐらいだと思ってたよ。（もしかしたら、二人より食べるかも・・・。）』

『おっ、早いな。来た来た、やったね。うまそうやん。』

『私は、サンドウィッチにしたよ。間食程度にね。』

『そうなんですか・・・フェイトさんって、少食？』

『お前が人並み外れて食うんだよ！お前を基準に考えるな！』

『そんなに怒るなよ。エヴァちゃんよ～。』

『ちゃんずけすんな、キモいから、マジでキモいから。』

『二回言うな！二回！傷がえぐれるだろうが！』

『あの～達也君？ご飯冷めちゃうよ？』

『そうだった。じゃあ食べましょうか。いただきます。』

『いただきます。』

それから、達也は一心不乱にご飯を食べ、フェイトがサンドウィッチを食べ終わるのと、余り変わらない時間で、食べ終わるのであった。凄い食欲である

『は～食った食った。腹五分目ってとこかな。』

『えっ・・・あんなに食べてまだ半分なの！凄いお腹だね・・・。』

『じゃあ、過去問取りに行きましょうか。どこにあるんですか？』

『ああ、過去問はデバイスに送っておくから。それでさ、その勉強私にも手伝わせてもらえないかな？』

『いや、大丈夫だよ。うん。多分、きっと。』

『おい、お前一人だと心配だから、一緒にやってもらえ。』

『大丈夫だよ。エヴァ』

『いや、フェイトさんに助けてもらいましょう。お願いできますか？』

『ちょっ、勝手に何言ってんだメディ！』

『私は良いけど・・・達也君どうするの？』

どんどん無くなっていく、達也の逃げ場。これは完全に勉強しなければいけない雰囲気になってしまった。

『（ちっ、計画丸つぶれじゃないか・・・せっかく最後に追い込みすれば良いと考えていたが・・・これは逃げられる状況じゃないな。）・・・わかりました。フェイトさん、お願いします。』

『うん。わかった。場所は達也君の部屋で良いよね？』

『どこでも良いですよ。でも良いんですか？俺の部屋、女性が入るような部屋じゃ無いですよ。私物いっぱいありますし。』

『うん。大丈夫だよ。駄目だったら片付ければいいしね』

『じゃあ、行きましょうか。』

『そうだね。もしかしたら、片付けなきゃいけなかったら、時間かかるしね。』

というわけでフェイトさんと
一緒に俺の部屋へ移動中
途中、シグナムさんに会って
模擬戦を挑まれましたが、
理由をつけてまた今度・・・
死刑宣告が伸びただけの気が
しないでもないけど、
まあ、気にしないでおこう。気にしない。気にしない。

そんなこんなをしているうちに僕の部屋に到着。
部屋の中に入って確認してみると・・・うん、なんかもう、凄いことになってましたね。

『うん。片付けからみたいですね。フェイトさん』

『そうみたいだね・・・さっさとやっちゃおうか！』

『そうですね。じゃあ、僕は床を片付けるので、台所の方お願いできます？比較的、そっちは綺麗ですから。』

『うん。わかった。じゃあ、片付け開始！』

というわけで、フェイトさんは台所、俺はリビングを片付けること

に。まあ、片付けている時の事は、変わったこともなかったので、割愛することにする。ただ、フェイトさんが台所が終ってから洗濯してくれる事になったとき、俺のパンツなどを普通に持っていたのには驚いた。普通は抵抗があるような気もするが・・・まあいいだろう。

片付けも一段落し、
いよいよメインの勉強を
始めるわけだが、此処からが
地獄だった・・・。

『じゃあ、始めましょうか。わかんないところ、とかあったら聞きますんで、よろしくお願いします。』

『わかったよ。こちらこそ、よろしくね。』

『テスタロッサよ、一緒にこいつがサボらないように監視を頼んでも良いか？』

『私からもお願いします。うちのマスターは、集中すれば大丈夫何ですけど、集中が切れるとあからさまに、サボりはじめるので・・・。』

『ええ、大丈夫ですよ。エヴァさん。メディアさん。』

『お、お手柔らかにお願いします・・・。（ヤベー。サボりのという退路も、閉ざされたよ・・・諦めてやるしかないか・・・諦めよう。）』

というわけで、勉強を始めた、達也。なんだかんだ言っていても、始めてからわずか数分で、集中し始めて。もう、2時間になる。その間、フェイトは手元で出来る、デスクワークをやったり、本を読んだりして時間を潰していた。

『もうそろそろ、晩御飯の時間だね。達也君、台所借りても良い？』

『・・・。』

『あっ、勝手に使って良いですよ。食材とかも、冷蔵庫に入ってますから。』

『わかりました。メディアさん。使わして貰いますね。』

そういって、フェイトは2人分の夕飯を作り始めた。
ちなみにメニューは、麻婆豆腐とチャーハン、エビチリであるなぜ中華なのかというと、
達也は中華が大好きで、中華の本格的な調味料が有ったのである。
それに目をつけた、フェイトはメニューを中華にしたのである。

『この香りは・・・中華だ！』

『そうだよ。後2年分の、過去問終わったら食べても良いよ』

『はいっ！？2年分全部ですか！？マジですか！？』

ちなみに、1年分は達也の集中モードで1時間半なので合計3時間かかる計算である

よって、今は4時なので

3時間経っても、7時。
ご飯にはちょうど良い時間帯である。だが、達也は集中力が切れてしまっていた。

『さっさと終わらせよう。お腹すいたしね。』

『うん。頑張ってね』

だが、集中していない達也ではとても効率が悪く、終わったのは、8時だった。

『終わった～。疲れた～。お腹すいたよ～。』

『私も、お腹すいたよ。』

『すいません。俺のせいで』

『気にしないで。じゃあ食べようか。』

『じゃあ、せーのっ『いただきまーす！』』

『おぉ。うまい。美味しいですよ！フェイトさん！』

『それはよかった。今日の勉強はここまでだよ。ちなみに、明日、明後日と私用事無いから、朝からまた同じように勉強だからね。』

『げっ・・・まじっすか・・・それはきついっすね。』

『だって、達也君には、受かって欲しいんだよ。試験に。』

『ありがとう！フェイトさん！俺頑張るから！』

『うん。頑張ってね』

ピンポーン

そんなチャイムと共に、はやてと、なのはが訪ねてきた。

ケーキらしき箱を持って。

『調子はどうや？達也君？頑張ってるか？』

『はやて。どうしたの？なのはまで連れて。』

『実はね、頑張ってる達也君に差し入れしようかと思って。やっぱり、疲れた脳には糖分が必要だからね。』

『おーありがとう。調度ご飯後で、デザートがほしかったんだよね。』

『そうなんだ。それは調度よかったね。じゃあ食べようか。』

なのは達が持ってきたケーキを食べながら、みんなで談笑タイム。

だが、あと二日もこんな勉強生活。きついかもな～。いや冗談じゃなくマジで。

『じゃあ、私達は行くね。お休み達也君』

『ほななな、ガンバってな～。』

『じゃあね。またあした。』

『おう。みんなお休み。俺頑張るから！』

その言葉を聞くと、３人とも笑って、帰って行った。
そのあと、達也は眠りについたこうして、一日目が終わった。残り二日である。

六話　勉強という地獄　1日目（後書き）

≪第四回あとがきのコーナー≫
エ『おまえ、なんで遅くなった？なんか毎回あとがきでやってないかおい！』

作『ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ』

エ『お前、ガチでなのはにＯＨＡＮＡＳＨＩしてもらうぞ。』

作『ゴメンナサイヤメテクダサイゴメンナサイヤメテクダサイゴメンナサイヤメテクダサイ』
達『で、なんで遅れたんだ？』
作『宿題が多くて書く暇がなくてですね。』

エ『ハァ、こんどこそちゃんと更新しろよ！』

作『読者の皆様『『スイマセンでした！！』』』

達『これからも、遅れる事があるかも知れませんが、温かい目で見守ってやってください。』
作『あと、告知です。これから話の中で出てきた武器や技を後書きで紹介＆ａｍｐ；説明していこうと思っています。お願いします』
エ『これからも、見てやってくれ。それでは『『これからもよろしくお願いします！』』』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9790x/

リリカルなのはStrikerS〜オタク転生者の生涯〜

2012年1月15日00時50分発行